

# 流通の課題

4

東京都心から西へ40km離れた八王子市。独立行政法人都市再生機構（UR）の「集合住宅歴史館」に、前身の日本住宅公団が手掛けてきた住宅が保存されている。その中に「食寝分離」を掲げ、畳にとつての大きな分岐点となった部屋がある。

「ダイニングキッチン（DK）」と名付けて売り出したのは公団が最初。これがその間取りです。案内係の木元理恵子さん（31）が、解体後に歴史館へ移築された蓮根団地（1957年建設）Ⅱ東京都板橋区Ⅱの住居をそう紹介した。

43平方メートルに6畳、4畳半の和室とDK。板張りの台所には人造石製の流し台がある。「当時は市販の洋式家具が少なかったので、ダイニングテーブルを備

## 岐路に立つイ草

第2部

2011・9・26

え付けてありました」と木元さん。

公団の発足は55年。戦災と大都市への人口流入による住宅不足解消は国政の大きな課題だった。その一翼を担った公団は、10

年で30万戸建設を掲げ、郊外を中心にサラリーマン向け中高層団地を大量供給していく。

大学の研究や公営住宅を参考に公団が提案したDKは日本人の生活習慣を二変させた。食事

と一家だんらん、畳部屋のちやぶ台からDKのテーブルと椅子へ。「食寝分離」を実現し、洋風で新しい暮らしは、高度経済成長を支える中産階級の憧れとなり、急速に普及。「団地族」の言葉も生んだ。

希望する場合を除き、床材は全てフローリング設計になったという。その理由をUR広報担当者は「賃貸では畳部屋の需要が見込めない。ベッドや家具が置きにくく、ふすまの手入れが面倒という声も多い」と説明する。

URが5年ごとに行う賃貸住宅入居者の意識調査でも「和室は要らない」と答えた人は2000年の12・9%から、昨年は22・5%に増加。65歳以上の高齢者がいる世帯が約4割に上ることを考えれば、若い世代を中心に畳離れは確実に進んでいるようにみえる。

牛島主幹は言う。「公団がDKを提案したころは、ここまで畳が減るとは思わなかっただろう。公団住宅の間取りの歴史は、日本人の『住まい』や『暮らし』に対する価値観の変遷を映し出しているように思う」



UR「集合住宅歴史館」に展示されている蓮根団地の住居。公団が初めてDKの間取りを採用した＝東京都八王子市

## 公団住宅

# 生活スタイル変えた「DK」

公団は99年に分譲部門から撤退。新規着工は老朽化した賃貸住宅の建て替えだけになった。その際、引き続き居住する人が

（渡辺哲也）